

# 身延山に於ける日蓮聖人の人間的一面

上 田 本 昌

日蓮聖人の一代六十年間に於ける全生涯の中で、最も落付いた環境に恵まれ、大自然に親しまれつつ、深い宗教的な思索をめぐらしながら、著述にいそしまれ、又門弟及び檀越の教化にと、ひたすら精進して来られ、「聖者」としての風格を、遺憾なく發揮せられたのは、文永十一年の初夏から、弘安五年の秋に至るまでの、身延在山九ヶ年間以外にはないと云えよう。

此の在山九ヶ年間を、従来身延時代と呼んで来ているのであるが、今爰では宗祖の晩年に於ける身延時代九ヶ年間にピントを合せ、宗祖の延山生活に現れた人間的一面を、祖書の上から探ろうとするものである。

古来、一般に宗祖の一代を論ずる時、その生涯を①鎌倉時代（立教開宗より竜日法難に至るまで。）②佐渡時代に（佐渡在島三ヶ年間。）③身延時代（在山九ヶ年間。）とに分類し、或いは佐渡流罪を分岐点として、佐前と佐後とにわかつ方法がとられて来ており、此の間に一線を画して、宗祖の人格の上に、佐前は人間としての法華経行者日蓮を認め、佐後は本化仏使としての靈格的存在者たる日蓮として、これを仰ぐと云う傾向が従来、強く見られているのである。

しかし、こうした大別二分類からすると、身延時代の宗祖は、当に仏使としての靈格者たる日蓮と云うことになりそこには人間的な香りが、全く些かも漂っていないかの如き感を抱かしめるものがあるかのように思えてくるのである。

果して身延に於ける宗祖は、百パーセントの靈格者として、人間を越えた存在であったのであろうか。それはたしかに鎌倉の市井を去って、遙かに人里離れた山中身延での生活は、世間を離れ、世人との交渉を断った聖者の境界をしのばせるものがあるが、その反面門弟・檀越に宛られた書簡の上から受ける感じでは、むしろ逆に極めて人間的な情愛に満ち溢れ、人の子として父母を慕い、師匠をなつかしみ、また弟子・信徒の身の上を案じて流された涙、慈愛のこもった血潮が、宗祖の全身に流れていたことに気付くのである。

立教開宗以来、宗祖はその心奥に深く「如来使」としての覚悟をきざみこまれ、仏の予言せられた如く、三障四魔の迫害と斗い、本化の「遣使還告」として、勇猛精進ひたすら法華経行者の險難をあゆまれて来られたことは、将に人間を越えた存在の如くであり、金剛不壊の如説修行と云い、勸持品の色説と云い、到底人間業とも思えぬ行動であったように考えられて来るのである。即ち、佐前のこうした果敢な力強い足どりの中に、むしろ靈格者としての一面を見ることが出来るのであって、佐前の宗祖を一気に「人間日蓮」として評することは、必ずしも当を得たものとは云えないのではなからうか。

これに対し、佐渡の宗祖は、特に身延時代に於ける在り方を見ると、山谷の大自然と親しみつつ、情愛溢るるまなざしで弟子・信徒の教化に当られ、或時は父母・師匠を慕って、遙か山頂より生地房州を拝し、又或時は庵の庭に立たれて、吹く風に身をまかせ、昇れる月に心をたくされ、人間味豊かな晩年を静閑にすごされた日々を窺うとき、

これを一概に人間性をはるかにこえた本化上行の靈格者としてみなすことは、これ又むずかしい問題であると云えよう。

つまり人間として生を受けた宗祖は、法華経によって人間を越えた本化仏使としての靈格者の立場に立たれ、然かも此の立場に安住されることなく、再び人間の情愛の世界にもどつて来られ、弟子・信徒に囲まれつつ、救済の導師としての生涯を送られたと云うように見ることができると思うのである。

芭蕉の有名な言葉に「心を高く悟りて、俗に帰すべし。」と云うのがあるが、宗祖は靈格者、即ち本化上行としての自覚を体験された後で、もう一度こまやかな人情の世界に立ちもどられた処に、大きな人間救済のための意義があるように思えるのである。但し、爰で云う人情・情愛と云うのは、あくまでも靈格の立場を一度色説体験せられた後に於けるものであるから、仏の大きな慈悲に根ざしたものであり、そこから発する慈愛の情、とても云うべきものであると考えられる。

こうした宗祖の身延時代に於ける靈格的一面の中に現れた人間像を、主として門弟・檀越に与えられた書簡の中から、いくつかを拾って、その一端を観察してみようとするものである。所謂、「現在の大難を思ひつづくるにもなみだ、未来の成仏を思ふて喜ぶにもなみだせきあへず。鳥と虫とは鳴けどもなみだおちず。日蓮はなかねどもなみだひまなし。此のなみだ世間の事には非ず。但だ偏に法華経の故也。若ししからは甘露のなみだとも云つべし。」と云われ、苦しいにつけ喜びにつけ、常に流された涙は、凡夫の流す涙と、涙そのものは変らぬとしても、涙を流された心奥については、大きなへだたりのあることを知らなければならぬ。即ち宗祖は、「日蓮は刀杖の二字ともにあひぬ。(乃至)日蓮仏果をえむに争かせうばうが恩をすつべきや。何かに況んや法華経の御恩の杖をや。かくの如く思

ひつづけ候へば、感涙をさへがたし。」と、法難につけても「感涙をさえがたき」状態であったのであり、そこには宗教者としての深い悟道に徹しられた聖者の「心を高く悟りて」のちに、再び「俗に帰りて」流される涙とでも云うべきものではなからうか。

## 二、

身延へ入山せられてからの宗祖は、その人間像に於て、一層慈愛の情が深く、涙もろい一面が強く感じられ、時には鎌倉時代に見られたあの勇猛果敢な法華経行者として、獅子奮迅の弘経に挺身されたその同じ人には思えぬ程の温情が感じられるのである。これは三十代から四十代にかけての壮年期と、五十代をこえ六十に近くなった晩年の安定した年令差も勿論考慮されるべきであろうが、何によりも身延と云う環境もその大きな要因の一つとして考えられて来る。しかし最も大事なことは、やはり宗祖の人柄であり、人間味に起因するところが、一番大切なことと云えるのではなからうか。

即ち宗祖は正法を誹謗したり、正しい信仰を否定しようとする者にとつては、此の上ない強敵として恐れられて来たようであるが、反面門下檀越にとつては、又とない慈愛に満ちたいつくしみ溢るる師匠として、一途に敬服の念を抱かしめる存在であつたようである。その慈悲の涙に洗れたようなまなざしで、信仰へのいざないを受けた門下にとつては、これが教化に於ける最も秀れた威力として、その効果を發揮しえたことであろう。宗祖の人間像、即ち人柄の中には、並々ならぬ思いやりの深さ、涙もろさがあり、こうした血と涙の慈愛は、やがて聖者としての「如来使日蓮」にも通ずるものがあると考えられて来るのである。

身延山に於ける宗祖は、門弟の悦びについては門弟と共に悦び、檀越の悲しみにあわれては、檀越と共に涙を流す

と云う、人間味のおふれた心境に住し、宗祖自身の問題としては、昼夜に靈山往詣の法悦にひたっては感激の涙を流し、国難の迫り来たるを憂えては、又涙せきあえずして、涙ひまなき姿であったのである。

例ば、入山間もなくして上野の南条殿に宛られた書簡の一節には、父を失った事の悲しみを慰め「御心のうち、をしはかるこそなみだもとまり候はね。」と遙か身延の人里離れた峰から、門下の不幸をとりあげ、その心中を察し悲しみといったわりの涙を惜しまなかった。「あわれ人はよき子はもつべかりけるものかなと、なみだかきあへずこそ候し。」と云う個人的な涙に対し、「抑も日蓮は日本国をたすけんとふかくおもへども」と述べられている如く、亡国の危機に直面した国土と大衆を救済するために、その全生涯が捧げられて行つたのである。しかるに「用ひられざる上、度々あだを、なさるれば、力をよばず山林にまじはり候ぬ。」と云う、一見消極的な人間として力尽きたるかの如き観をいだしむるような表現も見られ、更に大蒙古国の襲来によって、「皆人の当時の壹岐・対島のやうにならせ給はん事、おもひやり候へば、なみだも、とまらず。」と国土と大衆のための涙もまた汚れたものがあつたのであり、宗祖の「涙ひまなし」と云われたその涙は、個人・大衆・国土の悲しみ・愛い・危機を慮つての涙であつたのである。

又文永十二年の正月に、同じく南条氏へ宛て出された『春之祝御書』には、南条氏の父が嘗て鎌倉にありしとき、宗祖に帰依し法華信仰に精進したことをなつかしみ、「をもひやり候へば、なんだも、とどまらず。」と故人をしのぐのでの涙にくれておられるのである。是の如く宗祖のひまなく流された涙は、主として門弟超越のためであり、又国土と大衆のためであつたのである。自分自身については法悦による「感涙、をさへがたし。」と云う歡喜の涙以外にはなかつたと思えるのである。即ち仏果をうることの隨喜の涙であり、「聖者の涙」とも云うべきものにはかならな

いであらう。

こうした身延山に於ける宗祖は、「三度諫めて容れられずんば、山林に交る」と云う聖人賢哲の風格と、「釈迦如来の御神、我身に入りかわ（ら）せ給けるにや。我身ながらも悦び身にあまる。」<sup>⑩</sup>と云う本化仏使としての自覚を持たれた一面と、更にこうした霊格の中から滲み出た苦樂共に思い合せて涙を流された人間としての一面とが重なり合つて、門弟・檀越にとつては、無上の主であり、厳しさの中に慈しみあふるる師匠であり、血と涙の通つた親として、無二の存在であつたことが推察できるのである。

入滅に先き立つこと約十ヶ月、弘安四年の十二月に記るされた『上野殿母尼御前御返事』によると、米や清酒などの贈物に対する謝礼が述べられ、病身にとつて此の贈物が如何に身に沁むるものであつたかを飾り気なく記している。「此御志ざしは、いかんがせんと、うれしくをもひ候ところに、両眼よりひとつのなみだを、うかべて候。」<sup>⑪</sup>と病にとつてありがたき薬酒の贈られたことに對し涙を浮べての素直な感情の吐露がみられるのであつて、まさに霊格の中の人格的一面とも云うべき「人間日蓮」の一コマが爰にあると云うことが出来よう。

### 三、

次に入山後の宗祖にとつて、常に胸中であつて忘れることのできなかつたものに、父母と師匠をなつかしみ、生れ故郷を恋しく思われた「慕情」がある。これは人間として極く自然のなりゆきであるとも思えるが、天下國家の亡びんとするを愛え、国民大衆の、苦惱に打ちひしがれた状態に対して、涙ひまなき宗祖の人間像とは又異つた一面、即ち聖者とか或いは仏使とか云わるる一面をはなれた、純粹に一人の人間として、父母を慕い生國をなつかしむ心情を持った宗祖の全く個人的な一面と云うことが出来るであらう。

入山の当初、宗祖はたしかに隱遁者のな感概をもらしておられるが、これは次第にうすれて、身延の山を愛しその自然美にひたつて一乗妙典を受持することの法悦に、無上の俸せを感じておられるに至っている。但し、こうした聖者の生活の中にも、時として折りにふれ、父母を恋しくなつかしまれた一面が、赤裸々に表されているのである。例えば入山の翌年、新尼御前から「あまのり一袋」が送られて来たのに対し、その礼状に身延の地形や氣候を述べ、「彼の商山の四皓が世を脱れ」「竹林の七賢が跡を隠せし山」になぞらえて、その下に海苔から生国のことを次の如く想い起しておられる。

「古郷の事、はるかに思ひわすれて候つるに、今此の、あまのりを見候て、よしなき心、をもひいでて、憂くつらし。片海・市河・小湊の磯のほとりにて昔見しあまのりなり。色形あちわひもかはらず。など我父母かはらせ給ひけん、かたちがへなるうらめしさ、なみだおさへがたし。」<sup>⑩</sup>

此の一文から見ても身延山に於ける宗祖の人間像の一端が、明らかに浮き彫りされて来ると思える。宗祖は常に「我父母」「日蓮の父母」と両親をなつかしく思われ、追慕の情こまやかであったことは、既に山頂から房州を遙拝された事実で徴しても明らかである。又建治二年三月、光日房に宛られた御書によれば、「生国なれば安房の国はこひしかりし」<sup>⑪</sup>とその情の切々たる様子が涙ながらに綴られている。たとえ生国故郷とは云え当時宗祖はたやすく安房の国を訪れることはできなかった。「父母の墓をみる身となりがたし、とおもひつづけしかば、いまさら、とびたつばかり、くやしくて」とある如く、たとえ海山をこえても「父母の墓をもみ、師匠のありやうをも、とひをとげざりけん」と云う心境であったのが、遂に果せなかっただけに、此の生国・父母・師匠への慕情は、極めて大きなものであったであろうことが推察できうる。

宗祖にとって、父母・師匠の恩に報いると云うことは、人倫の最も基本となるべきものとして考えておられたのであるから、此の両親追慕の情も必然厚いものであったことが背けよう。然し、「にしきをきて故郷へは、かへれといふ事は内外のをきて」であつたので、「させる面目もなくして本国へいたりなば、不孝の者にてやあらんずらん。」と不幸の身となることを恐れ、再びにしきを着て帰る時を予想され、その時こそ

「父母の墓をもみよかしと、ふかくをもうゆへに、いまに生国へはいたらねども、さすがこひしくて、吹く風、立つ雲までも、東の方と申せば、庵をいでて身にふれ、庭に立ちてみるなり。」<sup>⑭</sup>

と、若き日の故郷をなつかしみ、人一倍両親を慕われた宗祖の心中が、此の一文の中に雖如として窺えるのである。

親を思い師匠を追慕すると云う感情は、入山の二年後に旧師道善房の死去にあい、一層その師を思うの情が高まつて行つた。即ち『報恩鈔』を著して深く追悼の意を表しておられるが、それによると仏教徒たる者はすべからく「父母・師匠・国恩」を忘れるべきでなく、常に報恩の念を持って、「棄恩入無為眞実報恩者」の眞の意味に於ける報恩の大道を示し、そのためには仏一代の肝心にして、末法応時の大法たる法華を受持することに始るとするのである。

つまり宗祖の報恩思想は、法華の実践を通した上での報恩であり、倫理であつたのである。人倫の基本を報恩に求められたところに、宗祖の人格に於ける一面を知ることが出来るが、更にそれをして、大恩報謝の道は、法華の色説体験を通すことよつて可能となるのであると論じた処に、宗祖の報恩観に於ける最も大きな特色があつたと云えよう。

兎角、宗祖については、一般に佐前の獅子奮迅の動的一面のみをとらえて、他宗を折伏するあまり、熱烈な狂僧の如くに考え、極めて倫理性の乏しい斗士の一人として論ずる向きもあるが、これは宗祖の佐後、特に身延山に於ける

生活、中でも代表著作の一つとして数え挙げられる『報恩抄』を、全く理解しえない者の言であって、遺憾ながら宗祖を正しく理解しえないと云わざるをえない。『報恩抄』を中心として、在山九年間に認められた祖書の中には、上野殿に与えられた一連の御書に見られる如く、親子関係に於ける血縁・きずなを説き、又阿仏房夫妻宛、四条氏に宛られた書簡、池上兄弟に出された御書、等にそれぞれ見られる如く、夫婦関係を取扱い、夫と妻の在り方に於ける最も望ましい人間像を論じ、更に前記の『報恩抄』に見られる如き、師弟関係のうるわしい在り方。或いは四条氏とその主家たる江馬氏との関係を取挙げた主従の問題、更には領主波木井氏との師檀の關係に至るまで、あらゆる人間關係にわたり、深い愛情と理解、大きな報恩觀と追慕の情、いつくしみ溢るる涙、そしてどのような苦痛にみちた者も、悲哀に閉された者をも、すべてを暖く迎える偉大な抱擁力とを兼備した人格者としての宗祖が、そこに展開しているのを見ることができるのであって、それは同時に仏の大慈大悲につながるものであると云えよう。

#### 四、

以上、宗祖の身延在山中に於ける生活のうちから、特に人間的な一面にピントをあてて考察を試みて来たのであるが、前述せる如く一般には宗祖の純粹な宗教的觀念の高さと、世俗を離れた山中での生活が、世をのがれた隱者の如き感じを抱かしめ、所謂人間味にとほしい英雄・聖者としての性格を意味し、更に佐後の内省自覚から発した本化仏使としての「靈格日蓮」と云う教学的な面から生れた超人間的な性格の持主として見られ、何かしら近より難いものを持った聖人君子であるかの如くに誤解され易い面を有して来たように考えられるのである。こころした傾向を破って、身延に於ける宗祖の一面には、人間として極めて自然な血と涙の通った反面を有し、その血と涙はわれわれの凡情にもつながりを持ったものとして考えられて来るのである。

池上宗仲兄弟が信仰上の問題から、父親と不仲になり、遂に勘当され、宗祖の指示に従って再びその仲をとりもどした時も、或いは四條金吾がやはり信仰上の一件から主人江馬氏の反感をかって所領没収され、宗祖の陳状によって再び主従の仲をとりもどした時にも、宗祖は常に弟子檀越と共に泣き、弟子檀越と共に事に当り、そして共に喜びを分かちあっておられるのである。<sup>⑬</sup>

宗祖在山中の対人関係は、佐前のそれとは又変った一面を持っておられた。それは即ち佐前の活動期にあっては、極めて対外的であり、念仏者を初めとして、専ら他宗徒に向つての布教であつた。宗祖自身が「三類の強敵」と述べておられる如く、常に「敵」に向つて法を説かれたのに対し、身延にあっては主として弟子檀越の謂は「味方」に對して法を説かれ、教育されるに至つてゐるため、自ずと内省的温和な対人関係を結ぶようになって行つたとも考えられる。<sup>⑭</sup>

インドの靈鷲山を、本朝此の身延の嶺に移したとさえ云われた如く、此の山の自然と共に自適な九年間を、晩年内省的にすごされたその宗祖の姿を祖書の上から推察した時、佐前の何物にも屈せず法華経弘通のため不惜身命の活動をとげ、豪傑的超人的な一面を強く表に出された宗祖よりも、はるかに人間的なものを身延の宗祖の中に感ぜずにはおられないのである。<sup>⑮</sup>

こうした身延時代の弟子檀徒と俱に在つた宗祖のしみじみとした人間像を探ることによつて、これを二十世紀後半の現代に生きるわれ／＼の日常信仰生活に於ける人間像の上に、多少なりとも反映し資するところがあるとしたならば、その意義は決して少なくないものがあると考えられるのである。

〔註〕

① 昭和定本日蓮聖人遺文

七二八頁

② 同

一、六三六頁

③ 同

八三六頁

④ 同

八一九頁

⑤ 同

八三六頁

⑥ 同

八三六頁

⑦ 同

八三六頁

⑧ 同

八五九頁

⑨ 同

一、六三六頁

⑩ 同

一、〇五四頁

⑪ 同

一、八九七頁

⑫ 同

八六五頁

⑬ 同

一、一五二頁

⑭ 同

一、一五五頁

⑮ 上に向つては仏と俱に、下に向つては衆生と俱にあつた生涯である、と云うことができよう。

⑯ 古来、宗祖を評して、行動力と実践力は抜群であつたと云われているが、これにもう一つ、内省思考力もまた秀れていたことを等閑にふすべきではないと思う。更に、こうした実践行動と内省思考の力は、法華經の信から發し、大きな「人間愛」となつて燃え続けたのである。

⑰ 即ち、本仏の体内に生き、本仏の本願の中に在つて、その本願を達成するために一生を送つた人としての宗祖、所謂、実践宗教者としての人間像がそこにあると云うことが出来えよう。